Faculty Newsletter
教育学部ニューズレター
298 号（2015. 11. 16） 発行：埼玉大学教育学部 FD 委員会

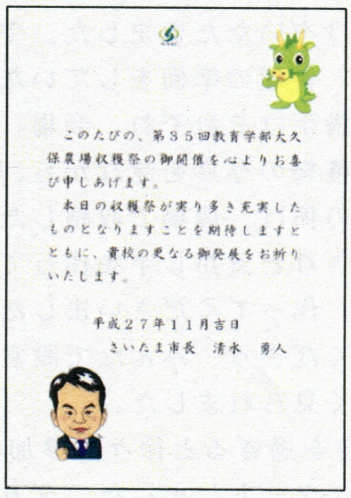
第 35 回教育学部大久保農場収穫祭のご報告

教育学部大久保農場主任（技術分野） 荒木 祐二

埼玉大学教育学部大久保農場にて、技術分野の「栽培技術の基礎（実習を主とする）」受講生一同ならびに大久保農場の主催による収穫祭が 11 月 6 日（金）に行われました。

当日は、大学から齊藤理事兼副学長、川又副学長、広報渉外室の武藤氏、経理課の西田氏、大泊氏、教育学部から山本副学部長、萩生田先生、小林支援室事務長、榊原事務長代理、中島総務係長、藤田学務係長、一戸氏、岩代氏、折原氏、齋藤氏、渋谷氏、森田氏、佐藤氏がご参加くださいました。また、さいたま市長からメッセージを頂戴しました。

司会は技術分野 1 年生の小林君が務め、はじめに農場主任である筆者が収穫祭の目的と大久保農場の活動概要を述べました。つづいて齊藤理事兼副学長から、「センター試験や大学入試が変わるなか、大学も自分の力で考える教育にしていかないといけない。農場での学習はまさにアクティブラーニング。これがこれから求められる。教育学部の他の授業でも、受講生の皆さんが本実習の経験を基に授業中に積極的に質問するなどして、教育学部を変えていただきたい。」といった受講生に向けたご挨拶を賜りました。続いて、川又副学長から「耕すを意味する“Cultivate”は“Culture”と語源が同じ。研鑽するという意味もある。35 年耕し続けて、すでにアクティブラーニングの文化を形作っている。皆さん自身も磨き、耕土文化のさらなる発展を祈念して乾杯。」というご挨拶と乾杯の音頭の下、宴が始まりました。


このたびの、第３５回教育学部大久保農場収穫祭の御開催を心よりお喜び申しあげます。
本日の収穫祭が実り多き充実したものとなりますことを期待しますとともに、貴校の更なる御発展をお祈りいたします。

平成２７年１１月吉日
さいたま市長　清水　勇人

歓談の合間には、ご来賓を代表して山本副学部長より「収穫祭は学生と話をする場で、かつては夏も行っていた。農場講義室も大きく変わり、前学長から本学執行部の方々にもお越しいただいている。受講生の皆さんも自分の学校教育を大きく変える存在になってほしい。技術の教員免許状を発行する県内 4 大学で、栽培をやっているのは埼玉大学のみ。1 年生には大きな期待がかかっている。」という励ましのお言葉を頂戴し、つづいて小林事務長から「35 年前に着任したときに教育学部に配属し、その直後に収穫祭に参加した。当時はこれほどいい部屋ではなかった。技術の学生には、いろいろな作物の生産、販売に尽力してもらいあ

りがとうございます。これまで35年続き、さらに続けて後輩にも引き継いでもらいたい。ここで勉強していい先生になってほしい。」とご挨拶をいただきました。その後、農場講義室内のプロジェクターを利用して、浅子技能補佐員より栽培実習のようすが上映されました。つづいて受講生による余興があり、リズムに合わせて単位を懇願するネタや、真顔で演じる空手の型に会場は大いに盛り上がりました。最後に全員で埼玉大学歌を斉唱し、前農場主任の石田先生による「大学歌は在職中から歌ってきた。部活の野球の大会などで歌えないかと思っている。収穫祭は深谷農場、大宮農場の頃より続いている。伝統ある行事を今後も続けてほしい。」という中締めのご挨拶をもってお開きとなりました。

毎年のことながら、収穫祭を経験することで受講生たちが成長する様子を感じています。準備から当日の運営に至るまで、栽培実習で培った自分たちで課題解決する能力と態度を体現し、自らがその成長を実感するイベントになっているように思います。大久保農場での栽培実習と収穫祭という、これまで自然体で続けてきた伝統が、今後求められるアクティブラーニングとして高く評価していただいたことも、受講生の学習意欲を高めるよい機会になったと思います。受講生が本学執行部や教職員を招待し、厳かながらも和気藹々と楽しめるこの収穫祭が、これからも農場運営に携わる皆様と受講生らの交流の場になることを願っています。今後も大久保農場の活動にご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2015年収穫祭を終えて

（技術分野1年生）扇野　彩

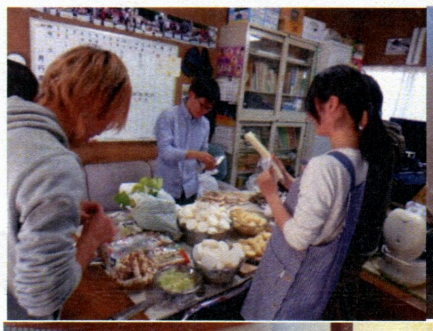
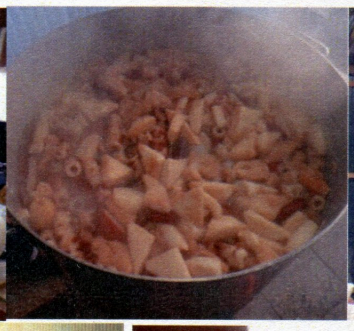
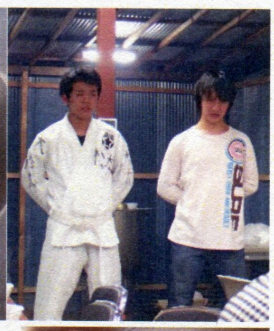
今年で35回目となる大久保農場収穫祭は、例年よりも1週間早い、11月の第1週目に執り行われました。入学前から、耳にしていた収穫祭に自分が実際に参加することができ、非常にうれしく思っている次第です。

今年度は埼玉大学教育学部再編成に伴い、栽培技術の基礎の受講者数が例年の半分程度という状況です。そのため、収穫祭の準備運営には、農場主任荒木先生、技能補佐員浅子先生をはじめ、前技官細田先生、栽培学研究室の先輩方など、多くの方々の手助けをいただきました。午前中は講義のあった受講生に代わり、外の臨時の調理場の設営、料理の準備をしていただき、受講生は午後1時からの合流となりました。

受講生はそれぞれ、会場、料理、余興に分かれて準備を行いました。会場の係は昨年の収穫祭の写真を見ながら、時にはみんなで意見を出し合って作業を進めていきました。料理の係は、農場で収穫したダイコンとコメとサツマイモを用いて、おでんとモツ煮とおにぎりと蒸かし芋を作っていきました。特にモツ煮は大きな鍋で細田先生が中心となって、作ってくださいました。作業の途中で細田先生が学生たちにアイスの差し入れをしてくださり、みんなで設営したテーブルを囲みアイスを食べるなど、和やかな場面が数多く見られました。

5時を過ぎると徐々に参加者の方が集まり、5時半には受講生の小林君の司会で、収穫祭がスタートしました。夕方の少し寒い時間のスタートであったので、テーブルの上の

料理からは湯気が立ち上っていました。参加者の皆様が私たちの栽培した作物を使った料理をおいしそうに料理を食べてくださっている様子を見て、非常にうれしくなりました。余興では、芳賀君と松本君が工夫を凝らした発表を見せてくれました。芳賀君は、音のトラブルにもめげずに全力でやり切り、松本君は、空手部で日々鍛えている成果を型で表してくれました。二人とも非常に堂々としていて、二人に余興を任せて良かったなと心から思いました。

参加者の方からのお話しでは、埼玉大学理事をはじめ、普段の学校生活では中々お目にかかることのない方々のお話しや、大久保農場の設備や歴史についてのお話しを沢山伺うことができました。どのお話しも、大変貴重で素晴らしいものでしたが、その中でも特に印象に残っているのは、埼玉大学理事のアクティブラーニングのお話しです。アクティブラーニングとは、机上でただ知識を詰め込み、機械的に物事を暗記していくのではなく、実際に体を動かしながら、問題解決のために自ら行動していく形の学びのことです。そして、理事からのお話しは大久保農場で今私たちが行っている栽培技術の基礎(実習を主とする)はまさにそのアクティブラーニングを体現しているというものでした。問題解決のために、自ら体を使い、行動していくのは、技術教育のどの分野においても、共通していることです。私たちは、技術科教員を目指すものとして、それらを学べる事、大久保農場などのそれらを学ぶ環境が整っていることにもっと感謝すべきだなと感じました。そして、技術科教員になるからには、アクティブラーニングの実体験だけにとどまらず、それらを子供たちに教えるための専門性や自分なりのアイディアや理念もきちんと形成していくべきだと感じました。

最後に、伝統ある収穫祭に参加することができて光栄であるとともに、大久保農場のさらなる発展と、自らの学びのレベルアップのため、残りの講義にも全力を尽くそうと決心することができました。これから技術分野にやってくる後輩たちにも、この行事を守っていってほしいと切に願います。